



AJEL

# 日本ラテンアメリカ学会 会 報



AJEL

2000年12月1日

No. 73

1. 理事会 (第93回) 報告
2. 近著紹介
3. 学術・文化情報
  - 海外ラテンアメリカ研究センター紹介
  - 研究動向
  - シンポジウム、会議案内
4. 事務局から

## 1. 理事会 (第93回) 報告

日時：2000年10月14日(土) 14:00-16:00  
 場所：上智大学中央図書館 L-620会議室  
 出席者：恒川 (理事長)、今井、大串、小池、  
 狐崎、清水、二村、松下、三田、高  
 橋 (書記) (委任) 飯島

### 〈報告事項〉

#### 各委員会報告

- (1)年報21号の募集通知が近日中に発送される。年報編集担当運営委員は人選中である。
- (2)秋期研究会の日時・場所・報告者が三部会とも確定した。今回の会合通知は上記募集通知に同封して発送する。
- (3)新会員名簿は、すでに発送した調査票中回収された323通等に基づいて作成し、12月中に配布する。
- (4)会報72号が発送された。
- (5)LASA大会で柳原透会員の組織する社会開発に関するパネルを学会として推薦する。
- (6)会計引継が進行中である。

### 〈審議事項〉

- (1)退会希望者1の退会を承認した。
- (2)入会希望者9名の入会を承認した。
- (3)長期会費滞納者で督促状に回答しない17名を会則に基づき退会扱いにすることを決定した。
- (4)会員宛通知の方法につき、現在eメールは会員の約4分の1しかカバーしていないので、会員全員に周知する必要がある通知は会報とホームページを通じて行い、eメールは

研究部会の通知等に補助的に用いることを決定した。ホームページには会員の研究に直接関わる会合や催しについての記事を積極的に掲載することとした。

(5)理事選挙規則等の見直しを行うため、新しい選挙管理委員会を設置することを決定した。

(6)春秋二回の研究部会の通知をより効果的に行うために、年三回の会報発行日をそれぞれ一ヶ月繰り上げて3月1日、7月1日、11月1日とすることとした。新しい発行スケジュールは74号から実施することとした。

(7)会報73号の編集案を承認した。今後の編集方針として「近著紹介」一編の分量は1ページを限度とし、著者の「回答」は掲載するがそれ以上の応酬は掲載せず、論争的な書評の掲載は年報に譲ることを決定した。

(8)清水理事の申し出により、編集長を同理事から大串理事に交代することを承認した。編集スケジュールを、12月中旬論文提出締め切り、1月中旬レフェリー審査締め切り、2月中旬修正原稿提出、3月中旬再修正原稿提出とすることを確認した。

(9)2001年度定期大会を名古屋大学で6月2、3両日に開催することを決定した。二村久則担当理事より、大会組織委員会構成案が提案され、これを承認した。

(10)学会事務センターより、会員数が500名を越えたために委託契約内容の変更が必要であるとの申し出があり、検討した結果、2001年4月1日付けて新契約を締結することとした。

(11)日本学術会議文化人類学・民族学研究連絡委員会のオブザーバー委員として三田理事を派遣することを決定した。

(12)日本学術会議が出した「女性科学者の環境改善の具体的措置について」の要望、および「日本学術会議における男女共同参画の推進について」の声明を検討した結果、当学会も様々な可能性を検討することとした。

## 第22回定期大会 研究発表及びパネル、ワークショップ募集のお知らせ

第22回定期大会は、来年6月2日(土)と3日(日)の両日、名古屋大学において開催される予定です。研究発表もしくはパネル、ワークショップ形式(3名以上)の発表を希望される方は、以下の点を明記してご応募ください。

(1)発表者の氏名・所属・連絡先、(2)発表題目とその分野(歴史、政治、経済、文学など)、(3)スライド、OHP、ビデオなどの使用の有無。

いずれの場合も、来年2月末までに下記実行委員会宛、書面、ファクス、あるいはE-mailにてお申し込みください。

連絡先：〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学言語文化部スペイン語学科内

第22回定期大会実行委員会

FAX 052-789-4826

E-mail k46302a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp [二村] もしくは  
k46240a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp [水戸]

なお、大会実行委員会のメンバーは次の通りです。

川田玲子、小池康弘、澤田真治、田中敬一、田中高、二村久則、  
松下マルタ、水戸博之、安原毅

## 国際シンポジウム『ブラジル500年—多文化社会への歩み—』への案内

日時：2000年12月9日(土)

9:30-17:30

場所：上智大学10号館講堂

通訳付き。入場無料

西暦2000年はブラジル「発見」からちょうど500周年にあたります。1500年4月22日、ポルトガル人航海士たちが今日ブラジルと呼ばれる地に初めて足を踏み入れてから今日までの500年間、その広大かつ多様性あふれる土地では21世紀世界のモデルになりうる多文化・多民族な社会が形成されてきました。

日本におけるポルトガル語圏研究をリードしてきた上智大学は、ポルトガル・ブラジル研究センターおよびイベロアメリカ研究所の共催により、国際シンポ

ジウム『ブラジル500年—多文化社会への歩み—』を開催します。ブラジルからオクタヴィオ・イアンニ(サンパウロ大学名誉教授)、二宮正人(サンパウロ大学教授)、ポルトガルからはジョルジュ・コート(カモンイス院院長)、アメリカからはロバート・レヴィン(マイアミ大学教授)を招き、講演していただきます。また、日本の代表的なポルトガル語圏研究者との意見交換も予定されています。

ブラジルそしてポルトガル語圏世界に関心のある方は是非とも御参加ください。お問い合わせは、上智大学ポルトガル・ブラジル研究センターまで。電話03-3238-3536

## 2. 近著紹介

丸山浩明著『砂漠化と貧困の人間性—ブラジル奥地の文化生態』

明石書店、2000年、xxxi+522ページ

紹介者：田村梨花（上智大学大学院）

ブラジルのノルデステ（北東部）は、国内で最も貧困指数の高い地域として知られている。貧困の原因を分析し、効果的な開発政策を模索するため、現在までさまざまな専門分野での研究が進められてきた。その多くは、多発する干ばつ、砂漠化の進行といった、自然環境要因を分析するものと、植民地時代に築かれた封建的家父長制と大土地所有制により歴史的に形成された、貧富の格差の構造を、社会文化的視点から分析するものに二分される。著者は、ノルデステを“ブラジルの基層文化が形成された場所”と位置付け、両者、すなわちノルデステの厳しい自然環境と過酷な生業形態の実際を詳細に検討した上で、その地で暮らす人々の生活様式と彼らに育まれた人間性に着目し、ノルデステの砂漠化と貧困の要因を文化生態的視点から分析しようと試みている。ノルデステで展開される地域開発政策の現状を分析する傍ら、文芸作品を資料にノルデステの生活世界を考察し、当地に形成された精神風土の把握を目指している。

本書は500頁を越える大著であり、その内容から4部に分かれている。字数の関係から各章のタイトルは記載しないが、各部の構成と概要は以下の通りである。

序章 人間・社会問題としての砂漠化と貧困  
**第Ⅰ部** 砂漠化と貧困の風土：ノルデステ内陸部のセルトンと呼ばれる領域の自然環境と開発、社会と文化、干ばつの歴史、干ばつ難民、干ばつが産み出す狂信と狂気、干ばつ政策の歴史的展開について述べられている。

**第Ⅱ部** 文学・芸術作品にみる干ばつと貧困の風景：文学、民族音楽、映画を資料に、干ばつと貧困の風景を分析している。

**第Ⅲ部** 砂漠化の大地に生きる人々—住民の生業形態—：大規模農場のファゼンダ、多種複合経営の行われる中小規模農場のシチオ、灌漑農業の形態に関する分析。

**第Ⅳ部** 砂漠化や貧困のメカニズムと対策—持続可能な地域開発の実現に向けて—

著者は、第Ⅰ部から第Ⅲ部までの考察をもとにして、本書の結論にあたる第Ⅳ部において、砂漠化と貧困との関係性の全体像を、実証的かつ体系的に解明することを目指している。まず、乾燥化の進行といった気候的要因よりも深刻な影響をもたらす、砂漠化の人為的要因を掘り下げる。ノルデステの精神風土と生活様式に関連し引き起こされた貧困と飢餓が、土地の劣化を促進、砂漠化を誘発し、それがさらに貧困を拡大するとして、砂漠化と貧困は表裏一体の関係にあると説く。その対策として、ノルデステの精神世界に刻まれた“沈黙の文化”からの解放をめざす、民衆公教育による意識改革が必要だと述べる。また、現実的な土地改革政策として、土地なし農民や労働者に対する遊休農地の合法的な開放を提案し、汚職にまみれた“干ばつ産業”の根絶を指摘する。農業改革、土地利用に関しては、具体的な政策提言を行っている。

干ばつの原因や農業形態の分析の部分と、ノルデステの精神風土の分析との関係性があまり明確にみえないこと、また、独創的に展開される文芸作品批評の部分が、作品紹介の域を脱せず、作品が人々によりどう語られてきたのか、というレベルでの考察がなされていない点で不満が残る。しかしながら、干ばつと貧困の関係性を解明するために必要な分析視点をあますところなく取り上げ、多角的な検討を試みている本書が、ブラジルの貧困の最も根元的な部分に立ち入った研究書として、貴重な資料であることに変わりはない。干ばつの引き起こす最大の社会問題として、難民の大量創出が指摘されていることから、本書は、都市スラムの問題や土地なし農民運動といった社会運動の歴史的社会的背景を認識するための必読書であるといえよう。

### 3. 学術・文化情報

#### ○海外ラテンアメリカ研究センター紹介

ジェトゥリオ・ヴァルガス財団ブラジル経済研究所  
Instituto de Economia Brasileira, Fundação Getúlio Vargas  
浜口伸明（日本貿易振興会アジア経済研究所・在リオデジャネイロ海外研究員）

ジェトゥリオ・バルガス財団はブラジルを代表する経済学・経営学の研究・教育機関である。リオデジャネイロのポタフォゴ海岸通りに本部を置く。ここで紹介するブラジル経済研究所（IBRE）は、その中核となる研究機関で、物価研究センター（CEP）、農業研究センター（CEA）、企業・金融研究センター（CEEF）、統計・経済分析センター（CEAE）、経済情勢分析誌（CECON）、プロジェクトコーディネーター（COOP）の6つのユニットにより構成されている。

IBREの機関紙である月刊誌*Conjuntura Econômica*（以下C.E.）は経済学の専門性の高い論文からビジネス戦略についての記事までを幅広く扱い、ブラジルで最もメジャーな経済誌の一つとなっている。記事は上で掲げた各センターの研究成果に基づいたもので、署名入りで質が高く、参考文献も付されているので研究者にとって便利である。毎号の巻末には物価、生産、貿易、労働市場、財政、通貨、金融、流通、国民所得などの豊富な統計資料も掲載されている。C.E.の定期購読者はインターネットのブラウザを通じて読むこともできるので、日本にいても時差を感じないで情報にアクセスすることができる。

C.E.が広く利用されている理由はいくつかあるが、もっともユニークなところは、IBREが独自に編集しているいくつかの経済指標である。たとえば、CEPが毎月調査している総合物価指数IGP-ID、主要都市における建設費用指数や防犯警備費用指数、などである。

これらは企業が生産コストを見積もる時に参考にできるものだが、CEPでは企業ごとの個別の費用構成や場所に応じてコスト指数を算出し、データベースを作成するコンサルタント業務も行っている。

また、CEEFが編集して年一度公表する500大企業ランキングも例年注目を集める特集である。ビジネス雑誌*Exame*や経済紙*Gazeta Mercantil*も企業ランキングを発表しているが、それぞれ特色のある分析をしており、併せて参照すると面白い。たとえば、C.E.のランキングは企業の総資産を基準にしているのに対して、*Exame*は売上高で見たものであるという違いがある。

さらにCEAEが行っている企業動向分析（*Sondagem*）にも触れておかなければならない。企業の生産、雇用、売上の見通しを四半期ごとに約1500社を対象にアンケート調査するもので、日銀の短観と同様に景気の先行指標として利用することができる。ブラジル経済の先行きを見るには有用な資料である。

この他にIBREでは、1999年から月刊*Agroanalysis*というアグロビジネス専門誌を刊行している。ここでは市場動向や最新技術についてCEAが行っている調査研究の成果が報告されている。

IBREに独自の図書室はないが、10万冊以上の蔵書を擁するバルガス財団リオ本部の図書館（*Biblioteca Mario Henrique Simonsen*）は一般に開放されている。開館時間は、月曜から金曜日の8:15~20:30である。なお、ビルの入り口で身分証明書の提示を求められるので、パスポート等を携帯されたい。

Instituto Brasileiro de Economia, Fundação Getúlio Vargas (FGV-IBRE)

Praia de Botafogo, 190-9º Andar-Rio de Janeiro-RJ-Brasil-CEP 22253-900

Tel. +55-21-536-9219、

Fax. +55-21-536-8349

インターネットホームページ：

<http://www.fgv.br/ibre/index.htm>

## ○研究動向

### 「第50回国際アメリカニスト会議出席記」

山田 陸男

(国立民族学博物館地域研究企画交流センター)

本年7月10日から14日からポーランドの首都のワルシャワ大学で開催された国際アメリカニスト会議第50回大会に出席してきた。実行委員長である同大学ラテン・アメリカ研究センター長のA・デンビッチ教授から日本におけるラテン・アメリカ研究について総会記念講演(毎日2件ずつ計8件のうちの1件)を行うよう依頼されたのである。なお、他の記念講演の中には、「米国の対ラテン・アメリカ政策」(H・ウィアルダ)、ポーランド人による「ヨーロッパとラテン・アメリカ」などもあった。

同会議は、125年前にドイツで設立され、3年毎にヨーロッパとアメリカ大陸で交互に大会を開催してきた。約1700名の参加者(発表者1500名、学生217名、ほかに同伴者71名)を集め、国際大会としては、比較的大規模な集会であった。内訳は、ラテン・アメリカから901名(メキシコ251名、ブラジル229名、アルゼンチン192名など)、ヨーロッパから682名(ポーランド315名)、北米から215名、アジアから15名などであった。日本からの参加者はきわめて少なく、ストックホルムの48回大会でもお会いした染田秀藤会員のほかには、米国やメキシコの大学で教えている若い研究者を2、3見かけたただけであった。

学会の名にもかかわらず、北米の先住民問題などの研究発表は少なく、ラテン・アメリカ研究を専攻者が圧倒的に多かった。多くの教室を使い、77のシンポジウム(パネルに相当)、7つのラウンドテーブルが開かれた。シンポジウムなどの分野は、人類学、考古学、芸術・文学・言語学、思想・宗教・教育、エスニック社会運動・人権、地域及び都市研究、社会・政治・歴史研究、経済・地域統合などであったが、事前に各議長が参加者からレジュメを集め、問題点を絞り、登録した参加者に資料を配り、議論を組織する方式であるため、つまみ食いのように参加しても、内容を十分理解することは容易ではなかった。

最終日の総会では、出席者の秘密投票によって、次回2003年の開催地候補としてサンティアゴが選定された。

3年ぶりに再訪したワルシャワは、町のなかの豊かな新緑がみずみずしく、目に染みた。ソ連と共産体制からの解放後すてにかなりの時間が経ったが、民主化も進展し、経済的にも問題はあるようだが、以前よりも活気に満ち、豊かになった印象を受けた。先日テレビのインタビュー番組で偶然見たワイダ監督も政治的経済的自由が人々の行動を変えた、と語っていた。

世界の各地から多くの知識人を集めて、人文社会関係の今回の学会が現時点のポーランドで開かれたことの意義はきわめて大きなものがあつた。大会開会式には、大統領(代読)、文部大臣、市長、学長などの挨拶が次々におこなわれ、この国の各界がこの学会を重視していることが理解された。また、3日目の夜には、大会役員、おもな参加者約100名が大統領官邸での夕食会に招待され、私も記念講演者ということで陪席した。そこでは、FIEALC(国際ラテン・アメリカ・カリブ海研究連盟)終身顧問のレオポルド・セア氏などから将来日本で同学会の大会を開催するよう、再度の要請を受けた。

緑の多い平坦な都市の中心部には、コペルニクス、ショパン、キュリー夫人などこの国が誇る世界的な人物を記念する建物や銅像が多い。商業的観光という観点からは、決して派手なところのないワルシャワだが、文化を尊重する気風は印象的であった。スラブ民族の国であるが、カトリック国であり、ラテン文字の使用をはじめ、古くからの意識的な西欧志向も感じられた。今回の大会では、毎晩有料無料の文化的な催し(会議主催4、市主催25)があり、文化尊重の傾向は、この国の誇りであることが察せられた。

大会運営の関連業務についていえば、ある旅行社が運輸、宿泊、アトラクションやツアーの予約、送迎などを担当し、多言語能力を持つスタッフや学生ボランティアを動員して、仕事をこなしていたことは、印象的であつた。

## ○シンポジウム、会議案内

### 1. 上智大学ポルトガル・ブラジル研究センター、イベロアメリカ研究所主催シンポジウム『ブラジル500年—多文化社会への歩み—』

詳細は2ページ参照。

### 2. 外務省主催シンポジウム

#### 「日系ブラジル人と日本社会—多文化共生の試み—」(仮題)

日時：2000年2月1日(木)

午前9時30分～

場所：外務省

日系ブラジル人と日本社会との諸関係を議論するシンポジウムの開催を予定しています(以下敬称略)。シンポジウムは教育、就労、コミュニティの3分科会から構成され、それぞれの分科会の座長は渡辺雅子(明治学院大学)、二宮正人(サンパウロ大学)、三田千代子(上智大学)が担当します。報告者には研究者のみではなく、NGOのメンバー、教員、行政官など多彩なメンバーが参加します。例えば第3分科会では、日系ブラジル人が日本社会においてどのような積極的な役割を果たしえるかを議論したいと思います。本シンポジウムの開催は、在日日系ブラジル人をこれまで個々に支援してきたさまざまな機関との連携、とりわけ行政諸機関の間、あるいはNGOと行政との間の連携を確立するための機会となり、今後の支援とコミュニケーションをより効果的なものとするを意図しています。つまり本シンポジウムは、学術目的ではなく、官と民(日系ブラジル人も含む)が一同に会して、日本社会における日系ブラジル人の現実の全体像をよりの確に捉えることで、今後の中央及び地方行政に役立てていこうというものです。ブラジル外務省からの参加者も予定しており、今後デカセギを軸に新たな両国関係が展開されることが期待されます。基調講演は堀坂浩太郎(上智大学)を予定しています。シンポジウムの詳細については上智大学ポルトガル・ブラジル研究センター三田千代子までご連絡ください(電話03-3238-3536)。

### 3. FIEALCモスクワ大会参加のお願い

ラテン・アメリカ、カリブ海域研究国際連盟(FIEALC)の次回10回大会は、モスクワロシア科学アカデミーラテン・アメリカ研究所の主催で来年6月26-29日同アカデミー本部(開会式、総会など)と外務省研修アカデミーおよび上記研究所(諸分科会)で開かれます。FIEALCは、メキシコの哲学者レオポルド・セア博士(現在終身顧問)のイニシアチブで1982年に関係研究機関の任意連絡組織として創設され、すでに2年毎にカラカス、マドリッド、バッファロ、パリ、カセレス、ワルシャワ、台北、タルカ、テル・アヴィヴで開催されており、2003年にはローマで、開催される予定です。

この連盟の趣旨が世界各地でラテン・アメリカ、カリブ海域研究を推進するということであるにもかかわらず、従来日本からの参加者が少なかったことから、関係者、とりわけロシア側は、日本のラテン・アメリカニストに参加を強く要請しています。私自身のイスラエルでの前回大会での発表と参加の経験からいっても、LASAよりもこじんまりとしているが、それだけに実質的な感じを受けています。われわれが、職業柄ラテン・アメリカとせいぜい米国などに足を運びがちであることを考えても、国際大会の機会に世界の別の地域を知ること知的な刺激を受けるという意味で大切なことであると思います。実は2005年には京都で開催してほしいという非公式要請を受けていることから、この組織との関係を強化して行きたいと思っています。

より詳細な情報は、次のソースから得ることができます。

<<http://www.plugcom.ru/~ilaran>>

<E-mail:[congreso-ila@mtu-net.ru](mailto:congreso-ila@mtu-net.ru)>

<[ilaran@pol.ru](mailto:ilaran@pol.ru)>

Fax: 7 (095) 953-4070

Tel: 7 (095) 951-5323/953-4639

Instituto de Latinoamerica de la Academia de Ciencias de Rusia,

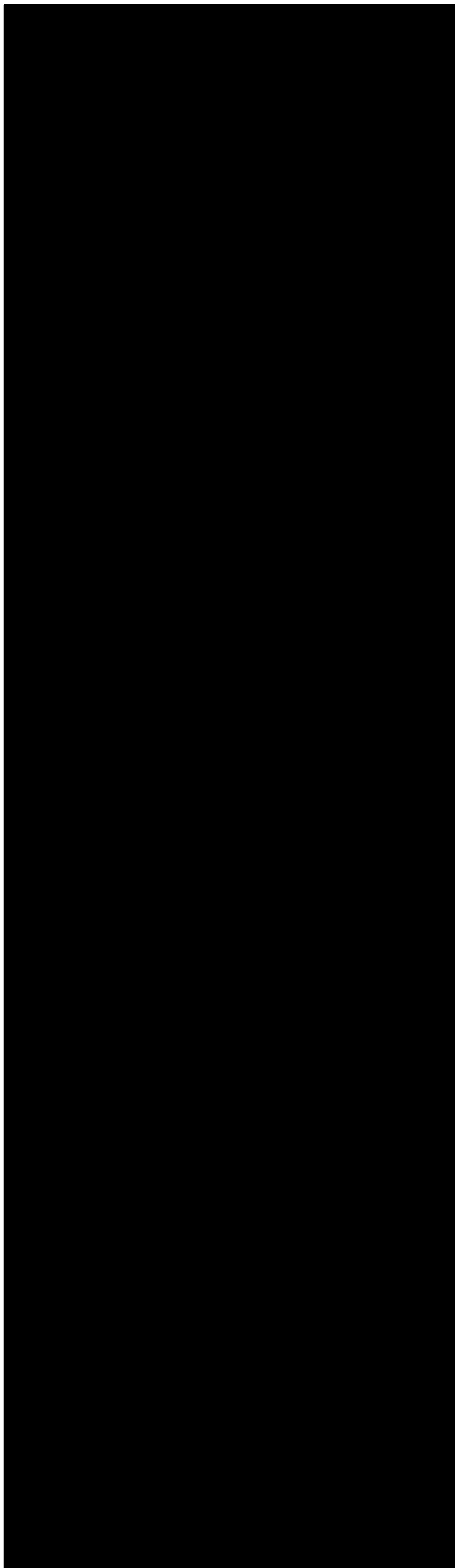
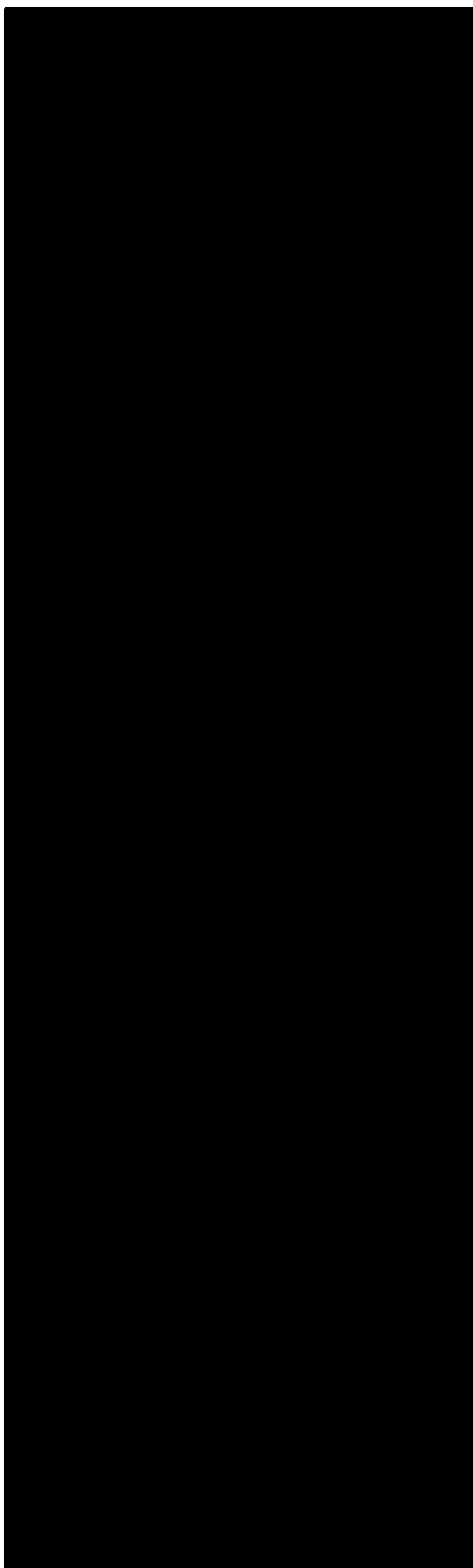
Calle B. Ordynka, 21, Moscu, 113035

山田 睦男

(国立民族学博物館地域研究企画交流センター)

#### 4. 事務局から

##### I. 会員関係



## II. 寄贈図書

○Yusuke Murakami, *La democracia según C y D*, Instituto de Estudios Peruanos (Lima)/The Japan Center for Area Studies (Osaka), 2000.

○Tsuyoshi Yasuhara. "Problemática de la supervisión financiera en México: inestabilidad financiera y política monetaria; un enfoque poskeynesiano." Tesis de doctorado (Facultad de Economía, Universidad Nacional Autónoma de México), 2000.

○『立教大学ラテンアメリカ研究所報』28号 (1999年度)、2000年

○木田いずみ・内田兆史編『ラテンアメリカ文学邦訳作品目録：イスマノアメリカ編』立教大学ラテンアメリカ研究所、2000年  
\*インフォメーション

1925年から2000年3月までに出版された1201点を網羅した本書(A5版、全117ページ、邦題および原題索引付)を希望者には実費でお分けします。下記に送料310円分の切手を同封して封書でお申し込み下さい。部数に限りがあります。品切れの際はご容赦下さい。

東京都豊島区西池袋3-34-1

立教大学ラテンアメリカ研究所

Tel/Fax 03-3985-2578

## III. ホームページへの掲載について

会員の関与する内外の研究集会・シンポジウム・講演会等の情報を学会ホームページ(<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/ajel/>)に掲載します。希望する会員は広報したい内容を簡潔

にテキストファイルで作成して、学会事務局のEメールアドレスに添付ファイルとしてお送り下さい。

## IV. その他

1) 編集委員会の運営委員の職を斎藤文子氏(文学担当、東京大学)に委嘱した。

2) 選挙管理委員会の運営委員の職を畑恵子(早稲田大学)、奥山恭子(帝京大学)、鈴木紀(千葉大学)、竹内恒理(つくば国際大学)、初谷謙次(天理大学)の各氏に委嘱した。

## 編集後記

師走。もうとうにあらゆることが21世紀初めの年、2001年に向かって歩き出しています。100年と言わないまでもこの数十年について、回顧と反省のないままに、新しい時代を展望したり希望をもったりすることに人の常とはいえ釈然としないのを感じます。ラテンアメリカをみても貧困など開発の失敗がもたらした傷はなお癒えていませんし、環境問題は今後深刻さを増すと予想されます。残された1ヶ月の間でも過去を振り返ることに当てようと思っているこのごろです。(小池洋一)

No.73

2000年12月1日発行

〒153-8902

東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科

恒川恵子研究室気付

日本ラテンアメリカ学会事務局

TEL 03-5454-6458

FAX 03-5454-4339

E-mail: tunekawa@ask.c.u.-tokyo.ac.jp

## 学会センターへの問い合わせ

住所変更・異動の御連絡および会費納入に関するお問い合わせは直接、日本学会事務センターまでお願いします。

(財)日本学会事務センター大阪事務所気付

日本ラテンアメリカ学会担当 大戸道子(おおとみちこ)

〒565-0082 豊中市新千里東町1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル14階

Tel.06-6873-2301 Fax.06-6873-2300

受付時間 9:30-5:30(土日休み)